

フィンランド・スウェーデン 視察報告

2019年9月1日(日)～9月8日(日)



学習支援事業 海外先進地視察メンバー

■参加者（氏名・学習団体名） ※五十音順

石原 孝子 環境とエネルギーを考える消費者の会 えこは一もにい
(松江エネルギー研究会 代表)

澤田 哲生 学術フォーラム・多価値化の世紀と原子力
(東京工業大学 助教)

鈴木 早苗 原発のごみ処分を考える会
(福井県地球温暖化防止活動推進員)

平澤 拓海 NPO法人メディアージ
(東北大学工学部 2年)

松本 惟 津田塾大学総合政策学部
(津田塾大学総合政策学部 2年)

渡邊 恭也 北海道大学放射性廃棄物処分勉強会
(北海道大学工学部 3年)

■ 訪問先



フィンランド

- ・ オルキルオト ビジターセンター
- ・ 低中レベル放射性廃棄物処分場（V L J）
- ・ オンカロリサーチギャラリー
- ・ オンカロ（地下岩盤特性調査施設）
- ・ エウラヨキ自治体（市長、地域住民）
- ・ エウラヨキ市内中学校（小中一貫校）



スウェーデン

- ・ キャニスタ研究所
- ・ エスポ岩盤研究所
- ・ 低中レベル放射性廃棄物処分場（S F R）
- ・ 最終処分予定地
- ・ エストハンマル自治体（市長）

報告 1

鈴木 早苗 原発のごみ処分を考える会



フィンランド
エウラヨキ市長



フィンランド エウラヨキ市長との懇談

- 「fairness and responsibility（公平性と責任）」という言葉強調していたことが印象に残った。
- 「最終処分をこの自治体で担うことを誇りに思う」とのコメントに感銘を受けた。「誇りに思える」ような意識改革が日本にも必要。
- 議会での冷静な協議の様子を伺い、また賛成の人も反対の人も、決議の結果を尊重し前を向いて進むという姿に感動した。
- 日本の行政には、国民との確固たる信頼関係の構築を訴え続け、また市民側には、処分を少しでも前に進める意識醸成の一助となる「学びの場」を提供し続けて行きたい。
- NUMOには、地域の人たちと真剣に向き合う覚悟をもって臨んでもらいたい。

報告 2

渡邊 恭也
北海道大学放射性廃棄物勉強会



エウラヨキ市
地域住民
(元議会議長)



エウラヨキ市 地域住民との懇談 (元議会議長)

- フィンランド国民への調査で、8割ほどの国民が規制機関STUKに対して「信頼している」と回答していたのが驚きだった。
- 技術への信頼がとても厚く、STUKが良い情報も悪い情報も全て開示しているという点でも信頼されていた。原子力発電に賛成か反対かにかかわらず、地層処分については、現状で発生している放射性廃棄物を処分するために必要なことと割り切り、建設的に議論を進めてきたという印象を受けた。
- 地層処分の必要性を理解し、日本で地層処分事業を進めるためにはまずその技術などを知る場が必要。
- 大学で原子力発電等を学ぶエンジニアの立場として、技術的な信頼を得られるように貢献したい。
- (同世代を含め) 若年層向けにSNSなどインターネットを通じた情報発信をして伝え、議論したい。

報告 3

石原 孝子

環境とエネルギーを考える消費者の会
えこはーもにい



フィンランド
エウラヨキ市内
中学校（小中一貫校）

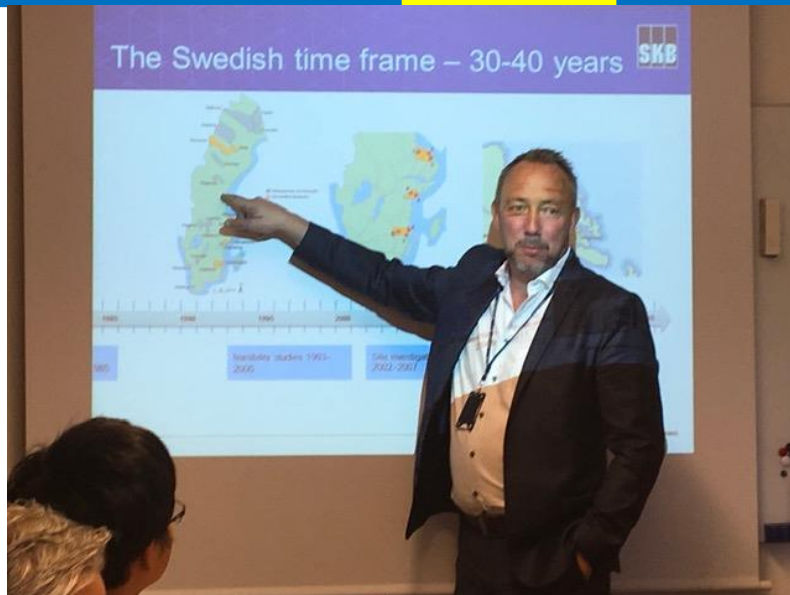


フィンランド エウラヨキ市内 中学校（小中一貫校）を訪問

- 今回の視察を通して印象的だったのは、自治体、地域住民と事業者の信頼関係がしっかり構築されていること。
- 視察を通してどこでも耳にしたキーワードは「信頼」。中でも「信頼」ができる人づくりの一端をフィンランドの教育方針に見た。
- バックキャスト思考を用いた授業を（日本でも）広め、「信頼」の熟成を。
- 「どうしたら自分ごとになるのか」「未来の子どもたち”にとっても重要な課題であり、考えてもらえるような機会を作っていきたい。
- 「おばちゃんが見て来ました。感じて来ました。『オンカロ』先進地視察記」を作成し、多くの人たちに情報発信していきたい。

報告 4

平澤 拓海
NPO法人メディアージュ



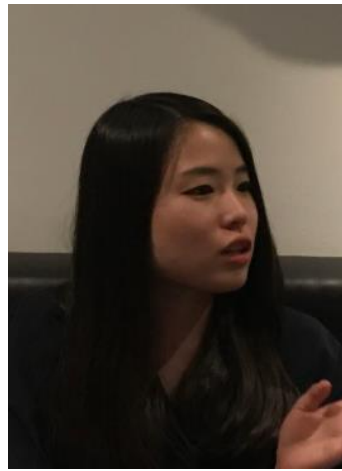
スウェーデン
事業者 SKB



スウェーデン 事業者SKBとの懇談

- 最も強く感じたのは、住民とのコミュニケーションの重要性。
- SKBは1990年代初め、地点選定で北部地域の受入れを望んでいたようだが、十分な信頼を勝ち取ることができなかったことを反省、その経験が今に生きている。
- 「dialogue and openness（対話と情報公開）」つまり情報に透明性を持たせて、求められたら即開示しメリット・デメリットを伝え、住民とのコミュニケーションを欠かさないことを強く意識しており、このことは日本でも（国やNUMOは）見習うべき。
- 長い努力の結果として、現在の処分場の決定まで至ったことを知り、日本でも、努力の結果次第で、充分地層処分を進めることが可能であるということを強く感じた。

報告 5



松本 惟
津田塾大学総合政策学部



スウェーデン
エストハンマル市長



スウェーデン エストハンマル市長との懇談

- 最も印象的だったのは「エストハンマル市は、最終処分場の誘致について、現在も決定権を有している」ということ。
- 「中央政府には、エストハンマル市の取組みについて、もっと関心と理解を示してほしい」という発言には非常に驚いた。
- 「日本は地震などの自然災害リスクを抱えているが、焦らずに時間をかけて地層処分を進めてほしい」といった言葉を聞いて、今の日本は、見方を変えれば、国民が納得して地層処分事業を進めるための議論や熟慮を重ねることができる段階にあるのだと感じた。
- 地層処分の知識のない人がいれば十分に知識を得ることのできる機会を提供する。その後、実施主体・国・国民とで十分に意見を交え、将来方針を検討するというプロセスが重要。
- 多くの人にこの問題について認知してもらい、考えてもらう機会を設けることが必要。ワークショップなどの開催を検討したい。

まとめ

視察団リーダー
澤田 哲生
学術フォーラム・
多価値化の世紀と原子力



まとめ 1



- 『これだったら日本でもなんら問題なく地層処分ができる』
これが、実際にオンカロを目の当たりにした実感である。
- エウラヨキ市の元議会議長は、原子力そして処分場に今でも反対の心情を持っている。「エウラヨキには原子力発電所もあり、それに処分場オンカロも加わり、この地域は原子力と永く共存し、それは今後も続く——その事実は、もはや否定しようがない」という言葉は重かった。
- 合意形成が比較的順調に進んだのは、「透明なプロセスと責任の明確化」にあることを、多くの関係者との意見交換を通じて改めて痛感した。その背景には、「オーソリティー」に対する揺るぎなき信頼があった。

まとめ 2



- 独自の教育手法にも秘密があるように感じた。問題解決にあたっては独創と協働を育む工夫がされていた。この点はわが国にあっても長期的な課題として、とりわけ初等・中等教育で取り組んでいくべきではないか。
- 高レベル放射性廃棄物の処分問題の解決には、「自分ごととして日本の未来のために何がベストな選択か」を国民一人一人が考えることが欠かせない。
- 「中学生サミット」を主宰する自分としては、「中高生主体の国際フォーラム」を今回の視察を通じて構想することができた。ぜひ、中高生を主体にした現地視察および現地校との交流の可能性を模索したい。